

発表タイトル	東亜聯盟運動と朝鮮・朝鮮人一日中戦争期を中心に一
発表者所属名	国際日本研究専攻 教授
発表者氏名	松田 利彦

一九三七年以降の日中戦争期は、朝鮮人知識人の多くにとって絶望的な時代だった。植民地朝鮮では朝鮮総督府が「内鮮一体」のスローガンのもと朝鮮人の戦時動員に本腰を入れはじめた。他方で、組織的な抗日運動が途絶えたこの時期、「転向」し「親日派」となる朝鮮人社会主義者・民族主義者も跡を絶たなかった。

このような中、朝鮮人知識人の「民族意識」は歪んだかたちをとって現れた。なかでも戦時期の朝鮮人にもっとも大きな影響をもたらしたのが、東亜聯盟運動である。東亜聯盟運動は、かつて満州事変の立役者であったにもかかわらず日中戦争に不拡大論を唱えたために陸軍中央を追われた石原莞爾が主唱した社会運動である。もともと、石原は体系的な朝鮮論をもっていたわけではなかったが、東亜聯盟運動が日中間の戦争停止の条件として「政治の独立」をかかげたことが、朝鮮人知識人の独立願望を刺激したのだった。

本発表で注目するのは第一に、石原自身も朝鮮人との接触にともない、一九三九年頃から朝鮮統治政策に対する独自の議論を形成していった点である。植民地朝鮮における「内鮮一体」化政策への批判や朝鮮「自治」論などは、この時期の日本言論界一般の言説と比しても異彩を放っていた。しかし同時に、その朝鮮論は、朝鮮人運動参加者の期待とは異なり、朝鮮独立の枠組みをもたないものだった。

第二に、東亜聯盟運動に多くの朝鮮人が参加したことである。朝鮮半島では、転向者・姜永錫が中心となって、一九四〇年に東亜聯盟運動組織を京城（現在のソウル）に組織した。後年の参加者の回想には、この運動を「親日を偽装した独立運動」とするものも見られるが、その実態は慎重に検討しなければならない。また、日本国内でも同じ時期に京都で曹寧柱が中心となり、朝鮮人留学生を巻きこんで運動を展開した。これも一種の転向者運動といえるが、曹寧柱の場合は、独立運動との決別を明確に自覚して東亜聯盟運動に参加し、そのために曹ら運動指導者層と多数派の朝鮮人留学生参加者の間には齟齬も生じた。名古屋では、尹相源を中心に東亜聯盟協会名古屋青年部（一九四二年結成）の運動が展開された。名古屋青年部を構成したのは、尹ら朝鮮人青年と小泉菊枝門下の女性たちだった。朝鮮人と女性という社会的劣位におかれたグループが展開した運動として興味深い。

最後に、東亜聯盟運動に参加した朝鮮人が戦後、たどった行跡を追う。東亜聯盟運動組織は一九四六年 GHQ によって解散させられる。「親日派」追及の厳しかった解放後の朝鮮半島でも東亜聯盟運動の痕跡は見いだせない。しかし、戦前、日本国内で東亜聯盟運動に参加した朝鮮人のなかには、曹寧柱や名古屋青年部関係者たちのように、東亜聯盟運動の後継団体を支えた活動家もいた。彼らは同時に、今日の民団に連なる戦後在日朝鮮人右派運動の創建にも大きな足跡を残している。